

令和 4 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属駒場中・高等学校	校長名	北村 豊
幼児・児童・生徒数（R5.3.1現在）	中学校 367 名 高等学校 485 名	学級数	中学校 9 高等学校 12
2 教育目標等			
① 学校教育目標	「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、国際社会で活躍できるトップリーダーの育成をめざす。		
② 学校経営方針	<p>学校教育目標達成のため、本校の伝統的な全人教育を基盤に、第 2 期中期目標・中期計画で本学附属学校が定めた 3 つの拠点（「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」）構想の成果を活かし、第 3 期中期目標・中期計画で掲げている「グローバル人材育成」と「インクルーシブ教育の推進」を積極的に実践する。先導的教育拠点として、これまで 20 年間継続してきた SSH の研究成果をまとめ、発信するとともに、SSH 後の新たな教育方針の確立をめざす。教師教育拠点として、本校の教育活動の発信を図るとともに、学校見学を積極的に受け入れ中等教育の発展に寄与する。国際教育拠点として、生徒の海外派遣や国内での国際交流を通して、国際社会で活躍できる人材の育成をめざすとともに、ICT を利用したオンライン国際交流のより充実した活用方法を検討する。</p>		
③ 重点目標	<p>「国の拠点校」「地域のモデル校」として、本学との連携の下、以下の 4 プロジェクトを中心に全教職員で取り組んでいく。</p> <p>① コロナ時代の学校生活プロジェクト コロナ時代においても有意義な学校生活であり続けるために、多様な取り組みを行い、具体化する。</p> <p>② 駒場流 不易と流行の教育デザインプロジェクト 本校が培ってきた「学び」の本質を提供し続けるための人・モノ・コトの相互作用について考える。</p> <p>③ 駒場レガシーの継承と活用プロジェクト 筑駒の育てる「力」とは何かを検討し、発信する。また、卒業生との連携や地域への貢献にも取り組む。</p> <p>④ 対外交流再構築プロジェクト 他附属校や海外学校との交流のあり方を捉えなおすとともに、将来構想や SSH 後の教育活動について考える。</p>		

<p>④ 前年度（令和3年度）の成果と課題</p>	<p>4つのプロジェクト①～④（前年度に設定）を中心に、コロナが学校生活に及ぼす影響、その中でできる教育活動や社会貢献、教育のグローバル化の調査・研究・検証を全校体制で推進してきた。その成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <p>① 生徒が抱える不安や体調不良に関するアンケート調査やコロナウイルスを正しく理解するための専門家による講座を通して、現状の把握・共有を行った。また、オンライン環境下での「働き方改革」について、課題を整理し改善案を提言した。</p> <p>② 教科指導、総合学習、課外活動において蓄積してきた教材例や実践例を基に、長年にわたって継承されてきた学校文化について検討した。また、校内の情報環境の現状と課題を集約し、改善案の提示やその試行を通してより良い情報環境の提案を行った。</p> <p>③ 「筑駒アカデメイア」としてオンラインによる卒業生の講演を2回実施し、世田谷区民向けには録画を配信した。同時に、在校生にとっては「進路」を考える貴重な機会として持続可能なプログラムになるよう検討を行った。また、これとは別に目黒区との連携講座を企画・実施した。</p> <p>④ オンライン海外交流のノウハウや生徒の海外在住経験に関する調査結果を共有した。また、卒業生による海外進学・留学サポートプログラム、立命館高等学校等と共同で取り組む学習プログラムの開発・実践を通し、対外交流のあり方について改めて検討を行った。</p> <p>【課題】</p> <p>・SSH 経過措置終了後の新たな研究開発事業について検討を進める。</p>
---------------------------	---

<p>3 重点目標達成についての総括的評価</p>	
<p>4つのプロジェクトごとに取り組んだ内容を挙げる（①～④は「2 教育目標等 ③重点目標」と対応）。</p> <p>①では、一昨年、コロナ禍の対応を一丸となって行うため、コロナを正しく理解する勉強会等を開催した。同時に、生徒、教員が抱える不安やストレスを救いあげるノウハウが検討され、今年度はそれが実践された。さらに、会議の効率化を図るべく、合意形成のスキルアップを目的としたワークショップなども開催した。</p> <p>②では、本校の教育が外部からどのように評価されているのか、また探究学習、総合学習、道徳など、教員免許によらない学習に本校の特徴がどう現れているのか、について探った。また、急激に進むICT化によって、業務の内容や進め方がどう変化したか、またその変化に学校全体としてどう対応するべきかまとめた。</p> <p>③では、地域貢献の一貫として、生徒・教員・卒業生・保護者を組み合わせた「公開講演会」、「公開ワークショップ」、「公開講座」から成る「筑駒アカデメイア」を企画・開催した。また、慢性的に不足している資金やマンパワーを補うべく、卒業生（同窓会）との共催による新たな仕組みを模索した。</p> <p>④では、海外2校とのオンライン交流会、ならびに海外大学へ進学した卒業生による座談会を開催した。また、英語プレゼンテーションのスキルアップ講座や課外活動における国際交流の実践としてイングリッシュルームを企画した。さらに、特別支援学校や近隣施設との交流、他校における海外交流、外部資金獲得の Recherche 等、生徒の学外交流の情報収集とその共有を行った。</p>	

4 令和5年度の学校課題

「国の拠点校」「地域のモデル校」として、本学との連携の下、実験的・先導的な教育課題への取り組みと長期的視野に立った教育環境の改善を重点目標に定める。また、校舎の老朽化を補う環境整備を安全・安心の観点からも推し進める。さらに、文部科学省の新事業「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援」を推進するため、本年度新たなテーマで取り組む下記校内プロジェクト①～④（2年計画の第1年次）を立ち上げ、ここで得た知見を将来計画およびキャンパスリニューアルに向けた合意形成の礎とする。

- ① 教職員のコミュニティーや生徒観・学校観・教育観に関すること
教室内の学習・生活環境に関する理論的検証を行い、多様性を認め合う環境の構築を目指す。
- ② 教室内外の校内環境の整備やデザインに関すること
学校内における多様な学びの場の設定や整備に関する理論的検証を行う。
- ③ 卒業生活用や地域との交流を軸とした学校外の学びに関すること
卒業生との連携や地域への貢献の側面から、学びの場の充実を目指す。
- ④ 国際交流や他校との交流を含む学校外の学びに関すること
国際交流などに意欲的な生徒の意識や価値観を検証し、必要な人的・経済的な支援を目指す。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

4つのプロジェクト毎に具体的に取り組む内容を以下に挙げる（①～④は「4 令和5年度の学校課題」と対応）。

- ①「駒場」の生徒観、学校観、教育観を考える
専門家による教員対象のインタビュー等を通して、「生徒観」「学校観」「教育観」を言語化し、理論面で検証を行う。また、各教員が実践する教育活動・研究活動について、対外的な発表につなげたり、外部資金助成機関へ申請をしたりできるような支援を行う。
- ②「駒場」の環境デザイン -空間・時間・人間- を考える
図書館、保健室、グラウンド等、授業を受ける教場以外の「空間」と、そこで過ごす「時間」が、人間形成や人間関係を構築していく上でどのように機能し、いかなる価値を持つかを捉え直し、望ましい未来の環境デザインを考える。
- ③ 筑駒レガシーの継承と活用を考える
教育活動・研究活動の場に卒業生を活用することを想定し、学校教育との有意義な連携の在り方について検討するとともに、「卒業生活用」システムの構築を目指す。また、地域貢献の観点から、「筑駒アカデミア」、「目黒区連携講座」の継続運営を行う。
- ④「駒場」らしい国際交流 その将来性を考える
これまで国際交流に参加した生徒（海外大学進学や短期留学も含む）の価値観・考え方の変化に焦点を当て、本校ならではの国際交流の特質を明らかにする。また、交流活動を充実させるために必要な物理的・人的・経済的な支援について整理する。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- ・『筑波大学附属駒場論集第62集』筑波大学附属駒場中・高等学校（2023.3）
（教員の個人・教科グループ等による研究成果は、上記論集 p.155～164に掲載）
- ・『平成29（2017）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書経過措置1年目』筑波大学附属駒場高等学校（2023.3）
- ・『第49回教育研究会報告書』筑波大学附属駒場中・高等学校（2022.11）
- ・生徒の活動一覧（国際科学オリンピックでのメダル獲得など多数）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和4年度

学校名

筑波大学附属駒場中・高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>体験的な学習として、中1と高1ではケルネル田圃での「稲作実習」を実施した。また、フィールドワーク中心の実践的な学習として、中2では「東京地域研究」、中3では「東北地域研究」（3泊4日）、高2では「関西地域研究」（4泊5日）を実施した。さらに、高3では年間を通して「総合発表」に取り組み、文化祭でその成果を発表した。</p> <p>主体的な探究学習としては、中3では「テーマ学習」、高2では「課題研究・理科課題研究（ゼミナール形式）」、高3では「課題研究・理科課題研究（個別研究）」を実施した。また、教科主体で企画した「水保実習」（3泊4日）、「福島フィールドワーク」（2泊3日）なども実施した。</p>
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>本校の学校行事の計画・準備は、生徒で組織する委員会がその中心的な役割を担う。構成する委員が互いに協働する「場」が自主的・自律的な行動を自然と促し、リーダーシップとフォロアーシップを涵養するとともに、その精神を学校全体に浸透させる。令和4年度は、各学校行事に新型コロナウイルス感染症の影響も及んだが、委員会活動がコロナ以前の体制にできるだけ戻るよう整備を進めた。</p>
6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>高2の課題研究の一つである「障害科学・ともに生きる」では、筑波大学附属大塚特別支援学校、聴覚特別支援学校のほか大学・研究機関、卒業生等の協力のもと、さまざまな障害を持つ方々や関係者との交流や研修を通して、学習を進めた。新型コロナウイルス感染症の影響により、宿泊を伴う行事は中止となった。</p>
7-1-2	校務分掌や主任制等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	<p>校務分掌を含む学校運営に不可欠な非常勤講師、研究員、教務補佐員、事務補佐員の確保を進めるとともに、外部業者への委託、卒業生の活用を進め、各分掌・校内プロジェクト、学級担任が、部長や主任を中心に各部署で責任を明確にした役割分担を行い、持続可能な組織の整備を進めた。</p>
12-1-4	大学、附属学校教育局と連携した多様な学習内容・学習形態などに対応した整備の状況	<p>創立70周年募金活動によって得た資金をもとに、多様な学習形態に対応できる特別活動室の建築を大学と連携しながら進めてきたが、必要となった地盤改良や高騰した資材コストなどにより建築費が嵩み、計画を見直しせざるを得なくなった。</p>
12-1-5	大学、附属学校教育局と連携した学校教育の情報化の状況	<p>専門性を有する司書を継続して雇用し、学術コンテンツ・学習リソースが活用可能な図書メディアセンターの充実に努めた。また、Google Workspace for Education、Microsoft Teams、Adobe Creative Cloud等を全学年で導入し、授業コンテンツのさらなる充実化を図るとともに、中学版「GIGAスクール」構想を高校へ拡張するため、高校ホームルームおよび特別教室へのAP設置を推進した。</p>

14-1-3	先導的教育研究	SSH 研究開発事業では、探究型学習の教材開発と「理科課題研究」や学校設定科目である「課題研究」の実践を進め、その成果を、全国の SSH 生徒研究発表会や台中市立第一高級中学での生徒研究発表等を通して国内外に積極的に発信した。また、主体的な探究活動を支える基礎力育成を目的として、理数以外も含め、各教科が専門家による特別講座（講演・実習等）を企画・実施した。さらに、国立教育政策研究所の実践研究協力校として、理科（物理）の研究を進めた。また、新型コロナウイルス感染症の影響により中断していた「筑波大学訪問」を3年ぶりに高2を対象に実施した。
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習を年2回（3週間ずつ）実施するとともに、「第49回教育研究会」（理科・社会科・英語科）を完全オンラインで開催した。また、「SSH 数学科教員研修会」を長崎県立大村高等学校で開催し、授業の様子を含めた日頃の教育活動や SSH で得た成果を発信した。さらに、筑波大学の教職課程の「総合的な学習の時間の指導法」の講義において、本校教員がその一部を担当した。
14-1-5	国際交流・国際貢献	SSH 研究開発事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで開催した。また、長年交流のある釜山国際高校が主催するオンラインプログラムに参加し、いずれもこれまでの関係を維持することができた。また、研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「SSH 英語プレゼンテーションワークショップ」や「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立って実施した。
14-1-6	社会貢献	本校の人材（生徒・教員・卒業生・保護者）を活用し、「筑駒アカデミア」事業を実施した。まず、本校生徒を対象とした講演会の映像を地域（世田谷・目黒）住民に向けオンデマンド配信し、「公開講演会」とした。また、外部の専門家、教員、生徒が講師となった「公開ワークショップ」と、6講座の「公開講座」を区民向けに開催した。さらに、目黒区が主催する区内等教育機関への講師派遣や教員と生徒が一体となって行う地域の小学校への出前授業も実施した。